

《博士論文要旨》

万葉色彩表現の研究

— 赤色表現を中心に —

中 谷 藍 子

万葉集には、様々な色彩表現が用いられている。その中でも赤という色は目立つ鮮やかな色として多く詠まれている。赤と一言で言っても、集中には様々な赤が存在している。赤、茜、紅、丹、朱、はねずなどである。同じ赤でも、修飾している語の傾向は異なっており、用いられ方にそれぞれ特徴がある事がわかる。例えば、紅やはねずは染料として用いられている色で、用例にも染料としての特性が多く見られる。赤や茜は色として確立されたイメージが見られる。丹や朱は染料として詠まれている歌も見られる。このように集中で赤系統の色が詠まれている歌を挙げ、相違点を見ていく。そして、それぞれの用例で赤がどのように詠まれているか、色としてどのようなイメージを持っているかということ明らかにしていく。

第一章では、赤について述べる。赤の用例を見ていくと、赤という色彩がとても多様に用いられていることがわかる。また、日や朝の例は、色彩というよりは光そのものとして用いられている。これは赤という色が古くから色彩として認識されてきたからである。赤という色が持つイメージというよりも、単なる色として概念的に詠まれている

例が多い。そのため、用例が幅広くなっているのである。

赤の用例を見ていくと、他の赤系統と共通する例が多いことがわかる。赤は、顔料や染料の赤色全てを含んだ色であるといえる。そのため赤の用例は幅広く、また他の赤系統の色と共通の用例が多いと考えられる。

第二章では赤系統の一つである紅について述べる。紅は染料名であり、集中でも染料の特性を詠まれた歌が多く見られる。ここでは染料の紅と色彩の紅には用例でどのような違いがあるのか見ていく。

染料としての紅は、主に比喩歌に用いられ、特に恋心を表すのに用いられている。濃い紅は強い思いを表し、薄い紅は軽い気持ちを表現している。密かに契りを交わしたことが人に知られる歌にも、紅の鮮やかで目立つ色彩が用いられている。また、紅花や紅染めの衣を女性に喩えた歌もあり、紅が女性をイメージさせる色彩であったことがわかる。

色彩としての紅は、娘子の肌の色や紅葉などの鮮やかさ、若々しさというイメージが多く詠まれている。しかしそれと同時に、それらが

水遣には続かない、儂いものであるというイメージを持っていることがわかった。また、染料と色彩どちらの性質も詠まれた紅の例もあり、紅という色が染料と色彩に単純に区別されて詠まれているわけではないことがわかった。

紅における「にほふ」の表現は、半分以上が水と関わる例だった。紅葉や紅染めの衣の例にも見られるように、水に濡れることで色が一層鮮やかになることもあったようである。また、濡れるだけでなく、水に紅の色彩が映り、その色が照り映えるという用例も見られる。水によって、紅は色としての魅力をより強く表していたようである。

第三章では赤色と表現されている例が多い「裳」という衣服に注目する。裳は、女性が下半身に身に着ける、スカート状の衣服である。裳の用例を見ると、裳が濡れる、裳の裾を引くという表現が多く用いられている。裳が濡れるという表現は、男性の立場から見ると、女性の魅力を述べるために詠まれているが、女性の立場では、男性への思いの強さを表している。また、男性が裳を身に着けた女性を眺んだ歌は、女性への憧れが強く感じられる歌が多く見られた。特に裳を引く女性の姿に男性は憧れを抱いていたようである。女性は男性を見送る、あるいは男性が訪れるのを待つ状況で裳を濡らしている。裳を身に着けた女性が裳を濡らすのは男性のためである。そのため、男性への強い愛情を表すために裳は用いられていると考えられる。男性と女性では裳を持っているイメージは異なっているが、裳が濡れることで愛情の深さを表していることは共通した表現であることがわかった。裳の裾

を引く例では、男性歌は女性の美しさを表すために用いられているのに対し、女性が眺んだ歌は男性への強い思いを表す表現に用いられていた。女性が裳の裾を引くと眺んだ歌では、男性のもとへ通うなど積極的な女性の姿が詠まれている。また男性のもとへ通ったせいで裳が破れたことを詠んだ歌もある。これらは裳を濡らして男性を待つ女性とは対照的なイメージである。

集中で裳の色彩は、赤色系統のみ見られる。そして、裳の色が詠まれた歌は、全て男性が女性を見て詠んだ歌であった。色彩を詠むことで、裳を身に着けた女性を美化している。

赤裳と紅の赤裳の用例では、赤裳は濡れる表現が五例中四例であったのに対し、紅の赤裳は裾を引く様子が五例中四例であった。赤裳と紅の赤裳の違いとは何だろうか。紅は赤系統の一つの色であり、染料として用いられていた鮮やかな赤である。「紅にほふ」という映発表現もあり、紅という色が鮮やかで目を引く色であったことがわかる。そのため、「紅」というほうが「赤」というよりもより具体的な色を想像でき、紅の赤裳は赤裳よりも限定されたイメージで用いられていたと考えられる。

裳の裾を引く姿を詠んだ歌は女性への憧れが感じられると述べた。裾を引く姿が多く詠まれている紅の赤裳は、赤裳よりも憧れを抱く色であると考えられる。赤裳が濡れると色が一層際立ち美しさが増すということがあるが、紅の赤裳は濡れるという表現が一例しかない。紅の赤裳は、濡れるよりも裾を引いて歩いていく姿が印象的だったので

はないだろうか。

このように赤色系統には、概念的な赤から、顔料や染料としての特性を残して詠まれている丹や紅が見られる。また、より限定されたイメージを表現するために同じ赤系統の色彩を重ねた二重表現が用いられていた。赤という一つの色彩のなかにも多くの赤があり、それぞれの赤が持つイメージは非常に多様であることがわかった。